

《 論 説 》

ウィンドランダ

—— イングランド北部のローマ軍要塞について ——

南 川 高 志

論文内容の要旨

ウィンドランダはイングランド北部に残るローマ軍の要塞の遺跡である。ここは、ローマ帝国北部国境地帯を守った軍隊の駐屯跡がはっきりと観察できる場所であるばかりでなく、薄い木板にインクで書かれたラテン語の手紙など、ローマ時代の文書が大量に発見されたことで知られる。本論文は、筆者が2002年におこなったこの遺跡に関する調査・研究の成果の一部であり、遺跡の歴史と発見された木板文書について現段階で筆者が得ている情報を整理し、また文書を通して見える帝国北部辺境地帯の実態を論じたものである。

ウィンドランダ文書から知られる世界は、属州出身のローマ軍兵士が生きた帝国辺境の空間である。彼ら兵士たちは、地元のブリトン人を他者として差異化して得られる自己理解を持ちつつも、しかし排他的に「帝国」の支配を押しつけていたわけではなかった。ウィンドランダが位置する北部辺境地帯では、そしておそらく属州ブリタニア全体にわたって、「ローマ人」と「非ローマ人」などという単純な二項対立や近代的な民族概念には馴染まない、アイデンティティの流動的で可変的な世界が成立していたと考えられる。

は じ め に

ウィンドランダは、イギリスのイングランド北部、ノーサンバランド州にあるローマ軍の要塞の遺跡である。ここでは、帝政期の北部国境地帯を守ったローマ軍の砦の跡が見られるだけでなく、他に類例をみない大量の木板文書が出土した。この木板文書は、わが国でも日本古代史・考古学や中国古代史を研究する方々が木簡や竹簡との比較の観点から関心を寄せており、世界史的にも有意義な研究対象となっている。

私は、数年前からおこなっているローマン・ブリテン（ローマ帝国属州となったブリテン島）の研究の一環として、またローマ時代のリテラシーに関する研究との関連で、この遺跡や出土文書に関心を持っていた。すでに1996年夏に遺跡を訪れたこともあった。しかし、その後本格的に研究する機会なく過ぎていたが、ようやく2002年夏に文部科学省（日本学術振興会）科学研究費と高梨学術奨励基金の調査助成を得て遺跡を再訪し、同年の夏季のわずかな期間ではあったが、この遺跡の研究に初めて正面から携わることができた。本稿は、この

時に得たささやかな知見を整理するために書いたものである。内容は主としてウィンドランダ遺跡の歴史と出土した木板文書に限ったが、それらもまた、今後の本格的な研究のためのいわば序論に過ぎない。

2002年8月のウィンドランダ訪問の際は、あらかじめ連絡を取って、発掘活動の責任者であるロビン・バーリー博士に面会し話を伺った。博士は親切にもすべての遺跡敷地を案内し、とくに発掘現場では出土物をいちいち見せながら解説してくれた。また、博士とその研究協力者である夫人のパトリシアさんは、出土したばかりのものを含めて多くの遺物を彼らの研究室で見せ、発掘の状況を語ってくれた。さらに、同年夏にはオックスフォード大学古代文書研究所 (Centre for the Study of Ancient Documents, University of Oxford) を再訪することもでき、ウィンドランダ出土文書のデジタルイメージづくりに尽力されたジョン・ピアース博士からも話を聞くことができた。この時は、ピアース博士だけでなく、同研究所のフェローであるチャールズ・クラウザー博士からも貴重な情報を得た。本稿では、こうした調査から得られた情報はまだ充分いかすことができていないが、今後の研究において紹介・検討してゆきたいと考えている。

今回のウィンドランダ研究では、私自身が歴史学者であるゆえに理解や対応が及ばない部分があることを考慮して、考古学者であるケンブリッジ大学のジリアン・カー博士に研究の援助をお願いした。博士には考古学的研究の情報を整理することを依頼したが、本誌に同時に掲載される博士の論文は、その成果の一部である¹⁾。

ウィンドランダについては、わが国では日本古代史・考古学の専門家である田中琢氏が遺跡と出土物に関して早くに紹介文を執筆された²⁾。また、中国史の靑山明氏も漢代辺境を扱った著作でウィンドランダ遺跡を紹介しておられる³⁾。ただ、これらの業績は、両氏の専門の関係から、ウィンドランダについて書かれた英語の書物を参考にされたものである。一方、日本のローマ史研究者がこの遺跡にまともって言及したのは、管見の限り、私自身が書いたささやかなエッセイが最初であろう⁴⁾。私はまた、この遺跡と出土文書に関わるアラン・ボーマン博士 (現オックスフォード大学古代史教授) の研究書を評したことがある⁵⁾。最近になって、島田誠氏が文書をボーマンの編集したテキストで利用しつつ論文とエッセイを発表しており⁶⁾、ウィンドランダはようやく日本のローマ史研究者からも関心が寄せられるようになってきたといえよう。

後述するように、木板文書はそのかなりの部分がボーマンらによってテキストとして刊行され、近々増補された新版のテキスト (*Tabulae Vindolandesenses III*) が出るものと思われる。発掘についても、ウィンドランダ・トラストのホームページ (www.vindolanda.com) に随時最新経過が掲示されるので、日本にいてもかなりの情報は入手できる。しかし、ウィンドランダ文書は、その特殊な性格から見て、発掘まではゆかなくとも、少なくとも現場を詳細に観察し発掘に携わる担当者の話を聞かなければ、これを史料として利用する研究論文は執筆すべきではないと私はかねてより考えていた。考古学者ではなく、また依然として発掘に携

わったことがない私が、そうした立場のままでウィンドランダを語るのは無謀かもしれないと恐れつつ、しかし今回は書物を読んだ机上の作業だけではないと愚考して、あえてわざわざばかりではあるが、この報告書を草することにした。ペーパー・アーケオロジストのレヴェルにも達していないかもしれないが、今後歴史学者としての立場から研究を重ねることによって補ってゆきたい。

なお、本稿は、おおむね知見の整理にとどめる。以下で述べることとほぼ同じ内容の情報を基にして、ウィンドランダの意義、そしてウィンドランダから見えるローマ帝国について述べた文章が、近刊予定の拙書『海のかなたのローマ帝国』（岩波書店刊）に所収される。私のローマン・ブリテン観の一端もそこで明らかにされるので、あわせてご参照いただければ幸いである⁷⁾。

第1章 ウィンドランダの歴史

1

イングランド北部の中心都市、ノーサンバランド州のニューカスルは、かつては豊富な石炭資源をもとにした重工業や造船業などで栄えた都市であったが、現在では大学や観光、そしてショッピングで知られる町となっている。その観光の目玉の一つが、ローマ時代の防壁や要塞の遺跡だ。

ニューカスルは、ローマ時代に砦がつくられ、ポンス・アエリウス（「アエリウス橋」、すなわち皇帝ハドリアヌスの橋の意）と呼ばれたところであるが、現在では整備された史跡として、市の東部にセゲドゥヌム（現ウォールゼンド Wallsend）遺跡、そして東南のタイン川河口にかなり近い位置にアルベイア（現サウス・シールズ South Shields）遺跡があって、多くの見学者でにぎわっている。また、ニューカスル・アポン・タイン大学の古代博物館には、市の周辺から出土したローマ時代の遺物がたくさん展示されている。さらに、この都市は市の周辺の史跡観光のみならず、かの「ハドリアヌスの長城」見学の重要な玄関の役割を果たしている。「長城」の東端に近いこのニューカスルから、西端近くのカーライル市まで、鉄道だけでなく、夏季には見学者のためにローマ遺跡をめぐる「ハドリアヌスの長城バス」が走っているのである。

ハドリアヌスの長城は、紀元2世紀の前半に、現在のニューカスル東方のウォールゼンドからカーライルの西、ソルウェイ湾に臨むボウネスまで、ブリテン島を横断する形で117キロメートルにわたって作られた防壁である。スコットランドから軍勢を引きあげたローマは、帝国の支配に服しないブリテン島北部の諸部族の攻撃から属州を守るため、長大な壁を作り上げた。今日その名を残すように、この防壁の建造を命じたのは五賢帝第3番目のハドリアヌス（位117～138年）で、おそらく122年頃に皇帝自身がブリテン島に来て、建造を命じたと考えられている。もっとも、これを古代の文献で今日に伝えているのは、古代末期に書か

れた皇帝伝記集『ローマ皇帝群像』(*Historia Augusta*)だけで、その「ハドリアヌスの生涯」第11章に「(ハドリアヌス帝は)長さ80ローマ・マイルに及ぶ、蛮族とローマ人を隔てるための防壁(vallum)を初めて築いた」と記されている。

この防壁は、東端のウォールゼンドからアーシング川(Willowford Bridge)までの約67キロメートルは石造りで、それより西方は芝土でできていた。長大な防壁には、1ローマ・マイル(約1480メートル)ごとに見張り所が作られ、また軍を駐屯させるための大規模な要塞もいくつか設けられた。それらのうち、ハウスステッズ(Housesteads)やコーブリッジ(Corbridge)、チェスターズ(Chesters)などの要塞が、今日もかつての規模を示すことができる程度に遺跡として残っている。防壁そのものは、現在では石材が失われたり土砂に埋まったりして往年の規模は直ちには実感できず、丘陵地の稜線を走る長城の美しい姿を眺めることができる場所も限られているが、建造された当時は、石造防壁の高さが約4.5メートル、厚さ3メートル、芝土でできたものは厚さが6メートルもあったようである。防壁の外側にはV字型に深い溝が掘られていた。

このような大規模な防壁は、他に大陸でライン川上流地域とドナウ川上流地域とを結ぶように作られた防壁(リメス)などが知られるが、ハドリアヌスの長城のごとく堅牢なものではない。ハドリアヌスの長城を実際に建造したのは、ブリテン島に駐屯したローマ軍の兵士たちであり、完成したのちも、属州を守るために、この長城に沿って多くの兵士が駐屯した。イングランド北部のこの防壁とその周辺に投じられたローマのエネルギーと資金は莫大のものであったと考えられる。

長城のあるノーサンバランドからカンブリアにかけての地域は、緯度55度ほどで、極東では日本よりはるか北、サハリン(樺太)の北端部に当たる。気候は厳しく、とくに冬は厳寒で降雪もある。たいていの遺跡見学者は夏季にこの地域を訪れ、私自身も3度訪ねたが、いずれも夏であり、涼しくさわやかな天候のもとで遺跡を見ることができた。しかし、それは一年のごく限られた期間に過ぎない。地中海周辺地域とは大違いの風土なのである。ローマ人はなぜ故地と離れた寒風吹きすさぶこのような辺地にまで進出し、それに大きなエネルギーと資金を投じて辺境属州ブリタンニアを守ろうとしたのであろうか。

2

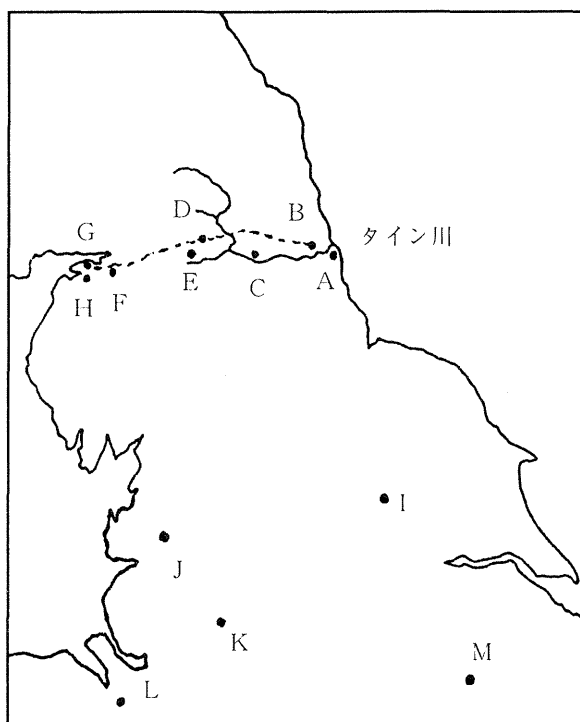
ニューカスルからローカル列車で西へ約30分ほど行くと、ヘクサム(Hexham)の町がある。7世紀に起源を持つ美しい聖堂(Hexham Abbey)があるこのcozyな町から「ハドリアヌス長城バス」に乗り、丘陵地帯のローマ遺跡に数ヶ所立ち寄りながら西へ進むこと約45分、旅人はウィンドランダ(Vindolanda)の遺跡に到着する。ウィンドランダという名は、アントニー・バーリーによれば、「ケルト系」の言語vindos、すなわち「白い」あるいは「輝いている」という意の語と、landa、つまり「囲い地」ないし「芝地」を表す語が繋がってできたものだという⁸⁾。イギリス人は通常「ヴ」ィンドランダに近い発音をするが、

本稿ではラテン語発音の原則に従い、「ウ」インドランダと表記する。

ウィンドランダは、ハドリアヌスの長城上に作られた要塞ではない。長城の南を東西に走るいわゆるステインゲイト道（Stanegate Road）に築かれた要塞である。この街道の方が長城より先に作られた。ウィンドランダに最初の本物の木造の要塞が築かれたのは、アグリコラ総督のもとで、ルグワリウム（現カーライル）とコリア（ないしコルストピトゥム、現コーブリッジ）とを結ぶこの街道が築かれてまもなくの時期、おそらく85年頃のことであろう。3.5エーカー（約1.4ヘクタール）ほどの広さの要塞で、土塁と堀に囲まれたものであり、約500名の歩兵が駐屯した。しかし、1世紀末にスコットランドからの撤退後の新しい戦略がはっきりした形であらわれ、ステインゲイト道沿いにいくつも砦が築かれて、帝国北部の国境としての機能を果たし始めると、ウィンドランダの要塞は強化、拡張された。ブリテン島の北部で物資を東側から西側へ輸送するために、ステインゲイト道の役割は重要で、ウィンドランダはその警備の重要な要塞となったからである。面積も倍の7エーカー（約2.8ヘクタール）の規模になって、収容できる兵士の数も同じく倍の1000名ほどになったと考えられる。要塞の周辺には民間人の定住する地区（vicus）も生まれた。

しかし、ハドリアヌスの長城が築かれると、それまでウィンドランダ要塞が果たしていたステインゲイト道とその周辺の警備は、長城に接した大規模な要塞ハウスステッツが担うようになった。ハウスステッツはウィンドランダから北東へ5キロメートルほどのところにあり、ウィンドランダよりやや大きい要塞である。現在はナショナルトラストが所有し、イングリッシュ・ヘリティジが管理をしているが、要塞の形や機能がよくわかる遺跡として多くの見学者を集めている。この要塞に北辺防備の役割が移ると、ウィンドランダ要塞は一時捨てられたようになったが、2世紀の後半のマルクス・アウレリウス帝の治世（161～180年）に再び強化された。今度は要塞を守る防壁や内部の建物が石で築かれるようになり、3世紀前半には石造要塞のさらなる拡張がなされた。この要塞は、4世紀の終わり頃まで機能したらしい。

ローマン・ブリテンの末期にはこの帝国北辺の地にもキリスト教が普及し、ウィンドランダ遺跡内部からも小さな教会の跡が発見されている。ローマ兵が去ったのちも、ウィンドランダには6世紀くらいまでは人が住んでいたらしい。そして、この地にローマの要塞があったことは、その土地の住民には中世を通じて知られていたにちがいない。しかし、その存在をイングランドに広く紹介したのは、近代初頭のウィリアム・カムデン著『ブリタンニア』（1586年）であった。その後、18世紀の初頭から19世紀の初めにかけて、この地を訪れた幾人かの旅行者がウィンドランダを観察して記録に残した。さらには、ノーサンバランドに駐屯した軍人ジョン・ウォーバートン（John Warburton 1682～1759年）が祭壇に用いた供物台を発掘したり、好古家でローマン・ブリテン研究の画期をなしたジョン・ホースリ（John Horsley 1684～1732年）が、碑文を熱心に記録した。しかし、遺跡それ自体は囲い込みのために要塞跡から石材が持ち出されるなどして荒廃が進み、石碑は刻文が削られて墓碑



イングランド北部のローマ帝国国境地帯

-----ハドリアヌスの長城

- A アルベシア (サウス・シールズ)
- B セゲドゥヌム (ウォールゼンド)
- C コリア (コーブリッジ)
- D ウェルニウィキウム (ハウスステッズ)
- E ウィンドラング (チェスターホーム)
- F ルグウェアリウム (カーライル)
- G マイア (ボウネス)
- H ブリガ (カークブライド)
- I エボラカム (ヨーク)
- J プレメテンナクム (リブチェスター)
- K マムキウム (マンチェスター)
- L デウァ (チェスター)
- M リンドゥム (リンカン)

に転用されるなどした。さらに、産業革命期の18世紀末から19世紀初め、ウィンドラング周辺は石炭や鉄、鉛などの資源に恵まれていたため、こうした資源や石材、粘土などを扱う人々が集まるようになって、ローマ軍が要塞を使用していた時代以来の活況を呈することになったが、このことも、遺跡の保存という点ではマイナスにしか働かなかった。

こうした中で、ウィンドラング遺跡の保存と研究という面できわめて大きな働きをなしたのが、アントニー・ヘドリー (Anthony Hedley 1777～1835年)である。聖職者であった彼は、1814年から、今日の考古学的発掘という言葉に値する活動を初めてこの地で開始した。要塞の守護霊 (Genius Praetorii) にガリア第4大隊長によって奉献された3つの祭壇をはじめ、貨幣なども発掘してその成果は大きかった。さらに、ヘドリーは1831年に遺跡そばのチェネリー川東岸に小さな家建てて、この地をチェスターホーム (Chesterholm) と呼んだ。

ヘドリーが1835年1月に肺炎で死亡すると、ウィンドラングでの発掘作業は一時休止することになった。19世紀の後半は、近隣のチェスターズやハウスステッズでの発掘作業が進んだが、ウィンドラングでの発掘作業が本格的に再開されたのは、第一次世界大戦後、とくに1929年にエリック・バーリーがチェスターホームの敷地と隣接の農場を購入してからである。エリック・バーリーはかのロビン・G・コリングウッドに勧められてハドリアヌスの長城の研究に向かった考古学者であるとともに、オックスフォードのロナルド・サイム教授らとも親交のあるローマ史研究者であり、ハドリアヌスの長城やローマの軍制の研究に成

果を上げた⁹⁾。そのエリック・バーリーの尽力により、この遺跡の全貌がかなり明らかになった。彼は、後期の石造要塞の西側、民間人定住地の下に1世紀末の木造建造物や溝、塁壁を発見し、また要塞の中の司令部の建物を検証したのである。

しかし、彼の研究は第2次世界大戦の勃発で休止せざるをえなくなり、戦後の1950年、ダラムのハットフィールド・コレッジの長として多忙になったために、彼はチェスターハウムの敷地などを売却した。その後、バーリーとその周辺は発掘と研究を続ける必要を強く感じていたが、ウィンドラング一帯の土地所有者との関係で難問が発生した。遺跡の残る地域が、その地の、あるいは個人の利害関係のため、つねに発掘などの学問的活動に協力的であるとはいえないのはどこの国でも見られる事情であるが、ウィンドラングもこの問題に苦しむことになったのである。

この難題は、エリック・バーリーの二人の息子、すなわちコリングウッドにちなんで名付けられたロビン・バーリーとヘドリーにちなんで名付けられたアントニー・バーリーの活躍で解決に向かった。二人の熱意と説得に応じて、それまでの土地所有者が好古家ダフニ・アーチボルド夫人に敷地を売却し、1970年夫人はそれを考古学研究のために贈与した。これに基づきウィンドラング・トラストが設立され、ダラム大学教授であったエリック・バーリーがその議長に就任した。そして、長男ロビン・バーリーは、夫人のパトリシアとともにそれまで務めていた教職を辞めてウィンドラングに戻り、その発掘と研究に全力を傾注することになった。彼の弟アントニー・バーリーの方はオックスフォードでサイムにローマ史を学び、ローマ帝国史の本格的な研究者として多大の成果を上げたが、帝政史ばかりでなく、ローマン・ブリテンに関する書物や論文も多数発表している¹⁰⁾。

1970年以来本格的に再開されたウィンドラング発掘と研究は、1973年に以下で述べる木板文書が発見されて、一躍世界的に有名になることとなった。また、ヘドリーの建てた家が改装されて博物館となり、そのそばに古代の神殿などが再現されて、訪れた者が公園のように憩える場所になっている。要塞や民間人定住地の遺跡に付随して木造の砦や防壁も再現され、ローマ時代の辺境防衛の実際を想像できるように工夫されている。現在は、ロビン・バーリーがトラストの理事長となって発掘作業を進めているが、費用がかかる考古学調査の前途は決して楽観的なものではない。しかし、現在のところ、トラストの活動は盛んで、1998年には女王エリザベス2世もこの遺跡を訪ねてロビン・バーリー理事長の説明を受けている。2002年秋にはデュッセルドルフ大学を退職したアントニー・バーリーがウィンドラングに戻って、兄弟そろって研究に当たることになった。また、ロビンの3男アンドリューも発掘成果を発表するなど、後継者として育ちつつある。あたかもウィンドラングはバーリー家の家学の観すらあるが、地域と協調しながら多大の資金が必要な研究を進めるためには、推進の核となる人材が必要なことはいうまでもなく、この点でウィンドラングは恵まれているかもしれない¹¹⁾。もっとも、ウィンドラングが他の史跡よりも格段に恵まれているのは、ここから多量のラテン語で書かれた木板文書が発見された点であることは間違いない。

第2章 ウィンドランダ木板文書

1

今日ウィンドランダを訪れて容易に観察できる遺構は、紀元3世紀初めに作られた石造の要塞、ならびにその内部にあった司令部（principia）と司令官の宿舎（praetorium）である。ローマ時代後期のこの要塞の広さは3.5 エーカー（約1.4 ヘクタール）ほどで、500人程度の兵士が駐屯できる規模であった。そして、おそくとも220年頃からこの要塞にガリア第4大隊が駐屯していたことが知られている。この部隊は4世紀の最後の四半期までここにいたらしい。司令官の居所であった建物からは4つの祭壇が見つかったが、いずれもガリア第4大隊の隊長によって奉献されたものである。400年以降に建てられたと思われる小さな建物が西端にあって、キリスト教会であったと考えられており、ローマン・ブリテン末期の北部辺境におけるキリスト教の浸透をうかがわせる。要塞の北東と南東の廉には便所があって、一度に12～16人程度が使用できた。

この後期要塞の西側には、要塞と同様に3世紀に築かれた兵士用の浴場があった。この浴場遺跡は、17世紀にはドーム型の屋根がまだ残っていたことが好古家の記述からわかるが、その後石材泥棒によって破壊されてしまい、現在では見ることができない¹²⁾。同じく後期の石造要塞の西側にある3世紀以降の民間人定住地も、その規模が現在もよくわかる遺構である。しかし、石造要塞やこの民間人定住地の遺構のように外観では見えないが、それらの下に隠された初期の木造要塞が考古学的にはきわめて重要な意味を持っている。すでに述べたように、ウィンドランダの要塞はその初期に幾度か規模を変えた。また、木造の要塞は7～8年ごとに建物を建て替えねばならなかった。今日目にする後期の要塞は、より規模の大きかった初期の要塞の上に、多少方向を変えて建てられているのである。したがって、発掘作業は、現在見えている遺構の下に、初期の木造要塞やその建築物、そして初期の民間人定住地を探索するところまで進まねばならなかった。

ウィンドランダの遺跡には、後期の石造要塞や民間人定住地の他に、円形住居の跡や神殿、井戸や貯水槽、そして2000年の発掘作業で発見されたハドリアヌス治世以前の兵士用浴場など、興味深いものが数多くある。1997年の発掘で見つかったティトゥス・アンニウスの墓碑の断片は、この人物が「戦死」したことを伝えており、ハドリアヌス帝治世の初期にこの北辺の地で戦いが生じていたことをはっきりと示した重要な証拠となった。また、石造要塞遺跡の北東のステインゲイト道沿いに立つ里程碑柱（マイルストーン）は、ウィンドランダ・トラストの発行する案内書によれば、元の場所に現在も立つブリテン島で唯一のローマ里程碑柱として、ギネスブックに登録されているという¹³⁾。しかし、このウィンドランダの名を世界的に有名にしたのは、この遺跡から数多くのラテン語で書かれた木板が出土したことであった。

1973年3月の発掘時、ロビン・バーリーは後期石造要塞の外にある民間定住地の南の縁に深く掘った排水溝で2枚の薄い木片を発見した。その2枚は明らかに張り合わせられていて、それを剥がすと内側にはインクで蜘蛛の巣状の文字が書かれているのが見えた。何が書かれているのか、また何語で書かれているのか、発掘者にはわからなかったが、専門家に分析を委ねるためにおいた数時間の内に、その文字は消えてしまった。しかし、赤外線写真をとって消えた文字を探してみると、それは、ウィンドラングに駐屯していた兵士に宛てて、履き物やサンダルなどを送ることを約束した手紙だったことが判明したのである（VT II, 346）。これが Vindolanda Writing Tablets、本稿でいう「ウィンドラング木板文書」の発見であった。

ウィンドラングでは、地中深く埋まってしまったローマ時代の遺物が、この地の嫌気性の環境、酸素不足の土壌の中で幸運にも保存されたようである。靴や山羊皮製のテントなどの革製品、布地、青銅や鉄でできた製品、そして木製品、なかんずく木板を今日に残した。木板文書は、この発見の年に86点発見され、詳細に整理するとその文書数は240以上になった。以後さらに見つかって、1989年までに1200点ほどになり、現在では総数2000点以上にのぼっている。ごく最近に発見されたものがウィンドラングの遺跡博物館にある以外は、すべて大英博物館に保存されており、その一部は同博物館のローマン・ブリテン・ギャラリーに展示されている（1981年に大英博物館が購入）。同様の木板文書は、ウィンドラングに比較的近いカーライル、南西方向のリブチェスター（ローマ時代のブレメテンナクム）、さらに南西のグロスターシアのレッチレイドやウェールズ南東部のケーリオン（イスカ）でも発見されたが、その数はごくわずかで、ウィンドラングの発見数には遠く及ばない。したがって、なぜウィンドラングだけに、という謎は残るのである。その史料的な価値の重要さを考えると、ウィンドラングでの発見は奇跡というに値するだろう。

2

ウィンドラングで発見された文字の書かれた木板は、正確に言えば2種類ある¹⁴⁾。まず比較的厚い板の中央を浅く彫り、そこに蠟を塗って金属製の筆で文字を書いて使用したものがその1つである。蠟は今日ほとんど失われているが、鉄筆で書かれた文章が木板に残って、今日でも判読される。このタイプの書板は地中海周辺地域に広く発見されており、とくにイタリアのポンベイから出土したものが古くから知られている。

しかし、ウィンドラング遺跡での発見を特徴づけるのは、このタイプのものではない。先に紹介したように、ウィンドラングで発見された文書の大半は、1ミリから3ミリ程度の厚さ、葉書大の大きさの木片に、灰とゴム糊のようなものを溶かして作ったインクで書かれたタイプであった。使用したインク・ペンのペン先も発見されている。木の材質は樺ないしハンノキ、まれに櫟である。当時地中海周辺地域でもっともよく使用されていた筆記用の材料はパピルスであったが、北辺のブリテン島では入手が難しく、軍隊などで簡単に作ることが

でき、かつ安価な木の薄い板で代用したと考えられる。このような木片はブリテン島各地で同じように使用されていたと思われるが、先に述べたように、ウィンドランダ以外ではごくわずかししか見つかっておらず、その理由は不明である。遺跡地層の保存状態の差にその理由の一端を求めることができるかもしれない。というのも、ウィンドランダは地下水位が1.5メートルほどで、木板文書が見つかった層はそれよりさらに下の、地表から4メートルほどのところである。絶えずポンプで排水しながら発掘作業をしなければならない。木板発見後は、遺物を傷つけないように地層をブロック状に切り出して地上で解体して調べるという手間のかかる手段をとらざるをえなかった。

さて、この木板文書は、発見された地層や他の出土物から考えて、廃棄されたものであったと見られる。ゴミと思われるものと一緒に木板は発見され、焼かれた跡の残る木板もあった。また、後述するように、この中には多数の軍事関係の記録が含まれているが、原本ではなく、写しであろうと考えられている¹⁵⁾。使われている言語はラテン語で、かつ草書体で記されている。速記法が使用され、綴りの間違いもあり、何より残存状態が悪くて欠損部分が多いため、木板文書の判読は困難を極めている。古典文学作品のような整った文章でもないため、解読は容易でない。パピルス学の伝統のあるイギリスの学者をもってしても完全に読み解くことは難しい。

しかし、アラン・ボーマンとデビッド・トマスの2人が、1973年から1976年にかけて発見された文書の主なものを1983年に校訂して公刊した¹⁶⁾。さらに、1994年には、先のテキストを改訂したものに1985年から1989年の間に新たに発見されたものを加えて、2度目のテキストを公刊した¹⁷⁾。ボーマンは同年、この文書を理解するための良き導きとなる研究書も出版したが¹⁸⁾、それによると、2度目のテキスト刊行の際に集めた文書のうち、おおよそ200ほどのものから意味のある文章が読みとれるという¹⁹⁾。現在ボーマンらは第3のテキストを準備中である。アラン・ボーマンが代表を務めるオックスフォード大学古代文書研究センターは、すべての木板文書の写真のコンピュータ化によるデジタルイメージを作成した。デジタルイメージの作成によって、文書の読み取りが改訂されて、今後より正確になるものと期待される。一方、文書の発見者であるロビン・バーリーとその弟アントニー・バーリーも、独自にテキストの読解と研究を進めている。

本稿では、以下でこの文書を引用するに当たり、ボーマンらの第2番目のテキスト (*The Vindolanda Writing-Tablets, Tabulae Vindolandenses II*, 以下 VT II と略記) を主として用い、その番号を示すことにする。そこに収録されていないものは、発掘後の登録番号 (Inv. と略記。ただし、内容の理解はアントニー・バーリーの近著に拠る) を示すことにしたい。文書の校訂・解読そのものに関しては、第2番目のテキストやボーマンの1994年出版の研究書²⁰⁾、ならびにアントニー・バーリーの近著『ウィンドランダでの駐屯軍生活』(2002年出版)²¹⁾ に原則として従う。ただし、ボーマンもアントニー・バーリーも、現在私が関心を抱いている近年の「ローマ化」や「ケルト」に関する議論に直接には参加しておらず、したがって、本

稿の以下でなされる史料の読み取りと事実確定を超える議論の展開は私自身のものである。

さて、地層や出土物の検討により、ウィンドランダ遺跡の年代は、文書発見者ロビン・バーリーにより7期に分けられている²²⁾。最初の木造の要塞が築かれた85年頃から92年頃までが第1期で、要塞の広さは最大でも3.5エーカーほどであった。トゥングリ第1大隊がここに駐屯していた。R・バーリーはその後の要塞が7エーカーほどに拡張された時期を2分して、92年頃から97年頃までを第2期、97年頃から103年頃までを第3期としている。この第2期にはトゥングリ第1大隊、第3期にはバタウィ第9大隊、および同第3大隊の一部が駐屯していた。さらに、第4期が104年から120年頃までで、この時期には再びトゥングリ第1大隊が駐屯していたが、他の軍団からの分遣隊もいたらしい。そして、120年から130年頃までが第5期であり、駐屯していた部隊が何であったかは現在のところ知られていない。第5期の後の30年間ほど、ウィンドランダについて詳細は不明である。先に触れたように、長城建設後の防衛システムの変更が関係しているのかもしれない。

マルクス・アウレリウス治世の初めに当たる160年頃から、ウィンドランダに新しい強固な要塞が築かれるようになる。この160年頃から180年頃までがウィンドランダのローマ占領の第6期とされている時期で、要塞は面積が縮小して4エーカーほどとなった。駐屯していたのはネルウィ第3大隊である。180年頃から200年頃までが第6A期で、面積は7エーカーほどに再び拡大した。205年頃から213年頃まで第6B期で、要塞は再び4エーカーほどに縮小されている。213年以降の第7期は、ガリア第4大隊が駐屯した時期で、要塞の面積は3.5エーカーにさらに縮小されている。

ウィンドランダ文書が実際に書かれた時期は、ほとんどが第2期以降、第5期までであり、とくに第2～4期である。第1期に属する地層から発見されたものがあるが、第2期の地層から沈み込んだ可能性を排除できない。第2期から第4期というのは、ローマ帝国の中央政治の歴史に照らすと、フラウィウス朝第3代の皇帝ドミティアヌス帝の治世後半から、彼の暗殺を経ていわゆる五賢帝の最初ネルウァの短い治世、そして帝国の最大版図を達成したとされるトラヤヌス帝の治世におおむね相当する。117年にトラヤヌス帝の跡を襲ったのが、長城を建てさせたかの皇帝ハドリアヌスであるから、ウィンドランダ文書は、長城の築かれる前のブリテン島のローマ軍の様子を今に伝える史料ということになる。

文書の内容は記録類と書簡に2分できる。文書、とくに書簡は、葉書大の薄い木板に、木目に沿って文章が書かれ、書かれた面を内側にして折り畳まれて、おそらく封印された。記録類のなかには帳簿的なものが含まれており、それは木目に直交する方向で書いて2つ折りのものを、両縁に穴をあけて数枚蛇腹式になるように繋いでいったらしい。

ところで、ウィンドランダの要塞に駐屯したのは、ローマ市民権保有者から成る正規の軍団ではなく、市民権を持たない兵士から成る補助軍部隊であった。そして、文書に直接関係するのは、第3期に駐屯したバタウィ第9大隊と第1大隊、そして第1期、2期、4期に駐屯したトゥングリ第1大隊である。バタウィ第9、および第1大隊は、ライン川河口、現在

のオランダに当たる属州ガリア北部地域から来ていた。ゲルマン人のバタウィ族から構成された部隊である。タキトゥス『ゲルマニア』(第29章)によれば、バタウィ族はライン川の河口の三角州に住み、ガリアに住むゲルマン起源の部族の中でもっとも勇敢な人々であるという。一方、トゥングリ第1大隊も、属州ガリア北西部のトゥングリ族出身者から成る部隊であった。トゥングリ族の名は、今もベルギーのリエージュ市の北方にあるトンヘレン(Tongeren ないし Tongres) という町の名に残されており、この町には現在ローマ軍要塞の跡が残っていて、新設されたガロ・ローマ美術館が出土物を展示している。このように、文書を残したウィンドランダ駐屯軍の一般兵士は、イタリア半島や地中海周辺地域から来た正規のローマ軍団兵ではなく、ブリテン島に比較的近い属州ガリアの北部から来た人々であった。この点には充分留意しなければならない。文書には、こうした兵士たちの日常を再現するような記録や書簡が数多く含まれている。次にそれを紹介しつつ、帝国辺境におけるローマ軍兵士の実態をまず観察してみよう。

3

ウィンドランダ文書は、その内容と性格において、何より軍事関係資料である。その点をもっとも明瞭に示しているのが、戦力報告書であろう。しばしばそのよい例として紹介されるのが、トゥングリ第1大隊の現有戦力が報告されている文書である(VT II, 154)。この文書の材質は、珍しく櫟の木であって、大きさも通常の木板の2倍ほどである。そこには、ある年の5月18日付で、ユリウス・ウェレクンドゥス隊長指揮下にあるトゥングリ第1大隊の戦力が記されていた。この文書は一番深い第1期に属する地層から発見されているが、先にも触れたように、第2期の地層から沈んだ可能性もある。

それによれば、総数752名のうち、5名の百人隊長を含む456名の兵士が不在で、ひとりの百人隊長と296名が陣営に駐屯している。不在の兵士のうち、2名の百人隊長を含む337名はコリア(Coria)にあり、また46名が軍団司令官(ないし属州総督)の護衛兵(singulares)として働いている。他に、ロンディニウムに百人隊長が1人、現文書では判読できない部分に書かれているため所在地が不明の5ヶ所に、百人隊長2名を含む72名がいる。この文書にあるコリアとは、ウィンドランダと同じようにステインゲイト道沿いにあるコーブリッジの要塞のことで、ウィンドランダの東20キロメートルのところである。A・バーリーは、ここにいる337名は新兵であろうと見ている²³⁾。

この文書にはさらに、現有の要塞戦力の中に、病人が15名、負傷している者6名、目の病気を患っている者(lippientes)10名、合計31名がいて、健康な者の数が265名であることも記している。かつて、ローズマリ・サトクリフがローマン・ブリテンを舞台にした歴史小説の一つ『第九軍団のワシ』(1954年)において、主人公を目の病を治す医者として設定したが、実際に当時のローマ帝国においては広く、とくに北の辺境には目立って多く眼病(lippitudo)を患う者がいたことが、こうした生の史料からも判明するのである。

次に注目される軍事文書は、レヌンティアと呼ばれる軍事報告書である。30 点以上残されているが、一文書 (Inv. 1418) を除いて全くの断片に過ぎない。その 1 つ (VT II, 127) は、欠損が多いが、おおよそ次のようなものである。

「バタウィ第9大隊報告。全員が就くべきその部署にあり。装備も万全である。オブティオネスとクラトレスが報告す。オブティオのウェレクンドゥスがこれを発給す。」

レヌンティアには一定の書式があって、最初に日付 (日・月の順)、部隊名が書かれ、次いで簡単な 7 語のラテン語で配置、装備の万全であることが記された (omnes ad loca (あるいは locum) qui debunt et impedimenta)。また、報告の最後は「オブティオネスとクラトレスが報告す」と結ばれた。クラトレス (curatores) はどのような役職か不明だが、オブティオネス (単数オブティオ optio) は、百人隊長代理というべき地位の兵士で、ローマ軍の内部で文書を用いる行政職的な性格の強い役職であったと考えられる。隊長への部隊査察報告書であるが、辺地の補助軍部隊であれ、日常のレヴェルでも口頭ではなく文書になっているところに注目できよう。

レヌンティアとならんで、休暇願いも軍事関係文書としてのウィンドランダ文書の特徴付ける史料である。現在 12 点ほど数えられるものから、比較的欠損の少ないものを 1 点、直訳調で紹介しよう。

「わたしは、ウルキウムでの休暇をお認めいただくに値する人間だと貴方がお考えくださるようお願いいたします。」 (VT II, 174)

この文書に見えるウルキウムが現在のどこに当たるかははっきりしないが、A・バーリーはウィンドランダとコリア、すなわち現在のコーブリッジとの間にあるニューバラではないかとみている²⁴⁾。休暇を過ごす場所が判明しているのは、他にはコリアだけであるが、兵士たちは休暇を過ごすのにそう遠くまで出かけることはしていないように思われる。宛名は、大隊の長であるケリアリス宛のものが 6 点、ケリアリスの先任のフラウィアヌス宛が 1 点、第 4 期の隊長プリスクス宛のものが 1 点で、休暇願が要塞の最高指揮官にあてて書かれたことがはっきりしている。

さて、要塞に駐屯する部隊の間では、作戦や種々の実務のために数多くの公式・非公式の連絡が飛び交ったが、そのためにこうした木板文書が用いられた。公的な連絡の文書の代表が、物資の供給に関わるものである。そもそも 1973 年 3 月の最初に発見されたウィンドランダ文書がこれに関するものであったが、その第 1 面には「私は貴方に、サットゥアから、() の履き物 (udo), 2 足のサンダル (solea), 2 組の下履き (subligar), 2 足のサンダル……を送った」と書かれていた (VT II, 346)。また、第 1 期の隊長ウェレクンドゥスの奴隷

に宛てた手紙 (VT II, 302) では、「つぶした豆 2 モディウス、ニワトリ 20 羽、リンゴ 100 個、いいのが見つければだが。それに卵 100 個ないし 200 個、適当な価格で売っておれば、……」と買い物の指示が書かれている。さらに、ウィンドランダ文書中、現段階で最も長文の「オクタウィウスのカンディドゥス宛て書簡」(VT II, 343) もまた、これに属するものである。横 18.2 センチメートルで縦 7.9 センチメートルのものと、横 17.9 センチメートルで縦 7.9 センチメートルのものの 2 枚の木板から成るこの手紙は、2 枚がそれぞれ折り曲げられているので、書かれた部分は 4 面あり、合計 45 行になるが、全面が物資の供給とその支払いに関わる話に費やされている。

一方、非公式な連絡の文書としては、推薦文書が紹介に値する。例えば、要塞の隊長フラウィウス・ケリアリスは、クラウディウス・カルスなる同等の隊長クラスの人物から、ブリギオヌスなる者を貴方に紹介したいと一書簡で請われている。その理由は、このブリギオヌスなる者をルグウェリウムの地域担当百人隊長であるアンニウス・エクェステルに推薦してほしいからだと述べられている (VT II, 250)。

ルグウェリウムは現カーライルで、ウィンドランダの西方に当たる。ここで述べられる地区担当百人隊長 (centurio regionarius) の仕事や権力については、史料の少なさゆえに明確にできることはわずかである。しかし、補助軍の百人隊長ではなく、正規軍団から来た者であって、辺境の地域住民を具体的に統治する責任を帯びていたと思われる。一方、ブリギオヌスなる者は、その名の冒頭の Brig- からして、地元住民、ないしはブリテン島在住の者で、おそらく商人ではないかと考えられる²⁵⁾。その商業活動のために駐屯軍との繋がりが必要であったのではないかと推定できる。地域担当百人隊長は、ウィンドランダ駐屯のケリアリス隊長ではなく、エボラクム (現ヨーク) 駐屯の第 9 軍団司令官によって派遣され、司令官に責任を負う者であろうが、ブリギオヌスとしてはまずは補助軍大隊長のケリアリスの面識を得て、その推薦をもらって地区担当百人隊長に面会するのが順序と考えたのであろう。

ウィンドランダ文書に見える辺地のローマ軍の日常は、以上にみたように驚くほど書かれた文書が飛び交うものであった。もちろんそのうちのかなりのものは書式がある程度決まったものでもあり、高度な書き言葉としてのラテン語能力を必要とはしない。しかし、口頭ではなく、すべてを書かれた文書を介しておこなう文書主義に、ローマ軍のある意味できわめて近代的な性格を認めないわけにはゆかないのである。ここで問題となるのは兵士たちのリテラシーであろう。これを厳密に計ることは容易でないが、ウィンドランダでなされた辺境防衛活動が、ローマ市民権を持つ正規軍団兵士ではなく、属州ガリアの北部から来ていた補助軍兵士のそれである点を重視するべきであると思われる。

4

ウィンドランダ文書の特徴は、すでに公的な性格を持つものを紹介したように、多くの書簡を含んでいることである。私的な書簡の中には、当時の人々のあからさまな気持ちが伺わ

れるものがある。例えば、マイヨルというおそらく民間人がマリティムスなる人物に宛てた手紙 (Inv. 1022) では、「今私はこの手紙を書きながら、ベッドを暖めています」と記していて、ベッドの中で手紙を書いていることを隠していない。ソッレムニスなる人物がパリスという同僚に宛てた手紙 (VT II, 311) には、パリスが自分に手紙を書いてこない筆無精に、はっきりと不平を言っている。

現在解読されている書簡の中では、バタウィ第9大隊の隊長であったフラウィウス・ケリアリスに関する書簡が目立って多い。第2のテキスト刊行 (VT II) に含まれる意味のわかる書簡 156 通のうち、ケリアリス関係は 66 通を占める。さらに興味深いのは、彼の妻であったスルピキア・レビディナに関する私的な書簡が 4 通あることだ。ローマの軍事制度のもとでは、兵士は在勤中の結婚と家庭生活を許されていなかったが、属州総督や隊長だけは別であった。ウィンドラングでも、隊長は夫人を伴い、陣営の中の司令官宿舎で通常の家族生活をおこなっていたのである。そして、ウィンドラング文書の中でもっとも興味深い書簡といえば、間違いなくこの隊長夫人に宛てて書かれた次の手紙、すなわちレビディナに宛ててクラウディア・セウエラなる女性が出した誕生日パーティの招待状であろう。

「クラウディア・セウエラより親愛なるレビディナ様へ。謹啓。来る9月11日に、姉様、私の誕生日の祝いに貴女様が来てくださり、また貴女様が来てくださることで私の誕生日がより楽しいものになるよう、ここに御招待申し上げる次第です。御主人ケリアリス様にもどうかよろしくお伝えください。私の（夫）アエリウスと私たちの幼い息子も、御主人様に御挨拶を申し上げます。親愛なる私の姉様。貴女様がお健やかでいらっしゃるように、心からお祈り申し上げます。スルピキア・レビディナ様、フラウィウス・ケリアリス様の御夫人へ。セウエラより。」 (VT II, 291)



クラウディア・セウエラよりスルピキア・レビディナへの手紙

写真の掲載は、大英博物館とオックスフォード大学古代文書研究センターの許可と御厚意による (By courtesy of the British Museum and the Centre for the Study of Ancient Documents, University of Oxford)。

書き手のセウエラは、ケリアリスと同じく隊長であったアエリウス・ブロックスの妻であり、彼女からレピディナに宛てたもう1通の手紙も発見されている（VT II, 292）。さらに、このセウエラの手紙に似た筆跡のものが1通あり（VT II, 293）、おそらくパテルナという名の女性からの手紙（VT II, 294）も1通残されている。こうして私たちは、ウィンドランダ文書のおかげで、1900年も昔の女性を書いた、しかし現代とほとんどかわることのない交際の様子を示す手紙を読むことができるのである。

隊長一家の要塞での生活の一端も、文書と出土物から明らかにすることができる。例えば、ローマの大詩人ウェルギリウスの叙事詩『アエネイス』の一節、第9歌473行が書かれた文書がある（VT II, 118）。これは、綴りが間違っており、書かれた字体ともあわせて、おそらく子どもの教育用に練習帳として用いた木板であろうと考えられている。勉強の合間に子どもが書いたと思われる落書きを残した文書も見つかっている（VT II, 121）。隊長の宿舎には、夫妻だけでなく子どもたちも一緒に生活しており、子供用の履き物も出土している。出土物にはほかに女性用のスリッパやヘア・ピースもあって、北辺の要塞とはいえ、隊長一家に関してはごく普通の家族生活が営まれていたことを教えてくれているのである。

さて、レピディナに手紙をよこしたセウエラの夫ブロックスは、ステインゲイト道西端のブリガの要塞の守備隊長であった。先の誕生日の招待状に見られるように、隊長の家族は、このような北辺でも行き来しながら親密な交際をおこなっていたわけである。こうした社交には、文学的な営為をとまっていたであろう。先の子どもの勉強用の『アエネイス』とは別に、2002年の発掘では同じくウェルギリウスの『農耕詩』第1巻125行が記された木片が出土した。軍隊の活動を離れて、このような社交やコミュニケーションがとられていたことは興味深い。さらに当時の人々の交際の実態を知るため、コミュニケーションの範囲を調べるべく、文書中で言及される地名に注目してみよう。

文書に現れるのは、ウィンドランダと同様にステインゲイト道沿いの場所が多い。カーライルとコーブリッジが頻繁に言及されるのは当然であろう。他に、ステインゲイト道の西端にあたる現カークブライドに同定されているブリガ、およびステインゲイト道沿いでウィンドランダの西方にあるニューバラに比定されるウルキウムが見られる。ハドリアヌスの長城より北にある場所は、コーブリッジの北方に位置するブレメニウム（現ハイ・ロチェスター）だけで、それも時期的にずっと離れた2世紀後半の文書に1度だけ言及されるにすぎない。長城以南では、正規軍団陣営であるエボラクムや同様の木板文書が見つかったブレメテンナクム（現リブチェスター）、そしてロンディニウムなどがみられるが、しばらく正規軍団陣営であり、コロニアの地位を得たはずのリンドゥム（現リンカン）は、現在の文書ではみられない。首都ローマも登場しており（VT II, 283）、A・パーリーはローマへの旅行の費用の話として考えようとしているが²⁶⁾、欠損多く文脈は正確には理解できない。

先に引用した戦力報告書では、ウィンドランダに不在の者が駐在する場所として、最も多かったのは近隣のコリアであり、ロンディニウムはわずか1名だけであった。休暇を過ごす

のもコリアが多かったと思われる。従って、属州総督や軍上層部からの連絡を別にすれば、ウィンドランダの一般兵士がブリテン島広く、あるいは大陸とコミュニケーションをもっていたとは想像しにくいのである。

では、彼らは地元のブリトン人たちと密な関係を持っていたのであろうか。

5

すでに述べたように、ウィンドランダという名はローマ軍到来以前からあった名称である。現在のところ、ローマの要塞建設以前にブリトン人がこの地域に居住していた痕跡は見つかっていないが、ウィンドランダ要塞のある場所は川の合流する地点に近いから、原住民の神域のようにになっていた可能性はあろう²⁷⁾。ただ、実際にウィンドランダ文書の中に「ブリトン人」という呼称が登場することはきわめて稀である。先に紹介した推薦状にブリトン人らしき人物が現れているが、集団として、あるいは「他者」としての「ブリトン人 (Brittones)」に言及する文書は、わずか2点に過ぎない。その一つは、物資供給の手紙の中で、「貴殿はブリトン人の車から、381 モディウスの穀物を受け取るだろう」(Inv., 1108) とある箇所である²⁸⁾。しかし、ここからローマ軍兵士とブリトン人との関係を考える手がかりは得られない。もう一つは、1985 年発見の軽蔑的な表現を含んだメモのような文書である。

「……ブリトン人たち (Brittones) は武具で身を守ることはない(?)。多くの騎兵がいる。騎兵たちは剣を用いることはしない。哀れなブリトンの輩 (Brittunculi) は投げ槍を投ずるために馬に乗ることをしない。」(VT II, 164)

このメモのような文書が何を伝えようとしたものかはわかっていない。従って、残念なことに、ウィンドランダ文書には現住ブリトン人の活動やローマ人 (ないしローマ補助軍兵士) との関係直接的に明らかにする手がかりは含まれていないのである。先行研究も、ウィンドランダ文書が与える情報はローマ軍兵士やその家族の活動に関するものであって、ブリテン島駐屯の「ローマ化した」ガリア出身兵士に関する知見は得られても、属州ブリタンニアの原住民、ないしその「ローマ化」に関する知見は得られないと見るのが一般的であった。メモらしき如上の文書に見えるブリトン人に対する軽蔑的な表現「哀れなブリトンの輩」(Brittunculi) は、ローマ軍兵士としてこの北辺に駐屯したローマ市民兵か「ローマ化した」ガリア出身補助軍兵士の眼差しを表すものであることが強調されている²⁹⁾。

先のメモらしき文書の意味や記述の目的ははっきりしないが、ローマ軍側のブリトン人現住民に対する他者認識の一端をうかがわせるものには違いない。もう1点、この問題を考えるための参考となる手紙を取り上げよう。それは、血を流すまで杖で打たれたらしい男が上官に抗議している手紙 (VT II, 344) である。そこには「私は海外から来た者 (trasmarinus)、無実の者が杖で打たれて血だらけになることを許さぬようお慈悲を請う」とあって、ボーマンや A・バーリーも指摘するように、この手紙の書き手は、地元のブリトン人なら杖で打たれても当然と考えているのである³⁰⁾。こうした史料からは、ウィンドランダの兵士たちが、

自らを地元のブリテン島住民より社会的に上の存在として位置付けていたことが判明する。先に述べた隊長一家の生活や交際、兵士の行動範囲などを合わせて考えると、ウィンドランダのローマ軍は、支配者として地元住民から浮き上がった存在であったように見える。

しかし、ローマ軍兵士とブリトン人との関係をあまりに隔絶したものとするのは今日的ではない。先の史料を基にして、属州ガリア北部出身の、従って「ローマ化」の遅れた地域から来ている補助軍兵士すら、ブリテン島住民を見下す態度をとっていた、と強調するのは、イタリアや地中海沿岸地域を基準にした一方的な見解であって、近年批判されている「ローマ化」概念の旧弊を引きずる説明であろう。実際、辺境における生活のために、ローマ軍兵士は在地のブリトン人と関わりを持たざるをえなかった。例えば、ガヴォ（Gavo ないし Gavvo）なる人物が隊長フラウィウス・ゲニアリス宛書簡などに数度（VT II, 192; 207; 218）、種々雑多な品物の供給者として登場しているが、「ケルト風」の名を持つこの人物を、A・バーリーは地元のブリトン人と考えている³¹⁾。さらに、すでに見た推薦の手紙が示すように、ブリトン人とおぼしき人物が隊長クラスの人たちと交際をしている事実があった。そもそもウィンドランダ文書の時代よりも以前、紀元 69 年前後にはブリテン島住民から軍隊が編成され、アグリコラ総督がスコットランドで戦った時には、そのローマ軍部隊にはブリトン人が含まれていた（タキトゥス『アグリコラ』第 29 章、および第 32 章）。また、バタウィ族の兵士やトゥングリ族の兵士がブリテン島に派遣されたほぼ同じ時期に、明らかにイングランド北部の住民から編成されたブリトン人の小部隊（numeri Brittonum）が属州ゲルマニアの辺境に派遣されていることが一碑文より知られている³²⁾。そして、ウィンドランダ文書に現れる人の名前も、ローマ（ラテン）風の名が多いが、「ケルト風」の名、ゲルマン風の名と研究者がみなしている人物名もたくさん混じっていること³³⁾も忘れるべきではない。

お わ り に

ウィンドランダ遺跡では、2001 年の発掘で遺跡敷地の北西端、ステインゲイト道のすぐ近くで神殿が発見された。この神殿はこの地に初めて要塞ができた頃に建てられ、2 世紀の終わり頃には火葬の墓所にするために壊されたと推定されている。どのような神を祀っていたかは不明であるが、形式からしていわゆる「ローマ＝ケルト風」神殿とされている³⁴⁾。またウィンドランダでは、駐屯した兵士の出身であるバタウィ族の主神マグサヌスも崇拝されていたことが判明している³⁵⁾。別のところで詳論するが³⁶⁾、ローマ時代のブリテン島では、兵士や住民の残した彼らの信仰に関わる史料からは、ドルイドに対するローマ政府の断固たる態度を別にすれば、宗教関係では軋轢は生じていない。駐屯する兵士も先住の民も、それぞれに自身の神性に願いをかけていて、他に干渉していない。そこには、これは「ローマ」のものであり、これはそうではないといった不寛容な峻別は存在しないのである。

実際、辺境の地に立つ者、兵士たちの日常は、ウィンドランダ文書に見えるように、淡々

と日々の課題をこなすものであった。生活に必要な物資を確実に入手することに多大の関心を有し、義務としての配置や装備点検を怠らず、また休暇を待ち望んでいた、そのような日々である。一般の辺境防衛の兵士は、政治担当階層のような全領土を見渡す帝国理解は持ち合わせていなかったであろうから、軍旗のもとで戦いに臨む時を除けば、「ローマ帝国」の拡大や防衛などという観念からは縁遠かったと思われる。兵士たちは軍務に忠実であり、帝国の兵士であることを誇りに感じていたとしても、そのことが「属州」や「領土」といった「帝国」の認識を持ち合わせていたかどうかは疑問である。

日常生活のために、彼らは地元のブリトン人と接し、時には境界の柵を越えて現地人と交渉した。退役した兵士が帰郷せずに陣営の近くの民間人定住地やブリテン島内の都市的定住地に落ち着くようになり、またそうした住民たちからローマ軍兵士が徴募されるようになれば、地元の住民との関係は一層親密なものとなった。彼らの信仰の世界は、アイデンティティの定義に困るほどの重層性を見せている。要するに、帝国辺境におけるローマ軍兵士の行動は、ローマ帝国に属する者としての自らを他者から差異化しつつも、現地住民に対して排他的に支配を押しつける先兵のそれだけではなかったのである。

総じて、「ローマ人」と「非ローマ人」などという単純な二項対立やそれに類する説明には収まりきらない状況が、辺境地帯の日常には展開していたと考えられよう。ローマ軍兵士が地元住民から一歩離れた自己認識を有しており、行動も隔絶していた部分があったが、同時に近代的な民族概念や法的思考に基づいてリジッドに理解するよりも、純粋な文化やその混ざりあいでは読み解けないハイブリディティ（異種混雑性）を前提に考えてみた方が、その実態を把握しやすい面も辺境には存在した。ウィンドランダの事情から、現段階でとりあえずこのような点が導き出されるのではなかろうか。

ウィンドランダ遺跡における発掘活動はこれからも継続され、新たな木板が数多く発見されて、本稿の段階では解明しえないような問題に関して、新知見を与えてくれるかもしれない。今後の新たな情報に期待しつつ、このささやかな調査報告を搁筆したい。

註

- 1) 本誌掲載のジリアン・カー博士の論説と拙稿との間に若干のデータ（年代や数値など）の点で違いがあるが、異なる情報源に基づいたためである。今回は論説の公表のためにあえてそれらを調整することはしなかったが、議論した上で違いの持つ問題点を明かにする機会を将来持ちたいと考えている。
- 2) 田中 琢「英国出土のローマ木簡」『木簡研究』7, 1985, pp. 179–186.
- 3) 榎山 明『漢帝国と辺境社会』中央公論社, 1999, pp. 230–239.
- 4) 南川高志「イングランド北辺のローマ帝国 —— ハドリアヌスの長城とウィンドランダ遺跡 ——」『地中海学会月報』200, 1997, p. 4.
- 5) 同「書評：A. K. Bowman, *Life and Letters on the Roman Frontier: Vindolanda and Its People*, London, 1994」『西洋古典学研究』46, 1998, pp. 144–146.
- 6) 島田 誠「北の辺境に生きるローマ人」学習院大学史学科編『歴史遊学』山川出版社, 2001, pp. 219–236; 同「ヴィンドランダ木簡とローマ女性の書簡」『地中海学会月報』255, 2002, p. 3.

- 7) 以下の本文における論述のために参考にした研究書とガイドブックのうち、とくにウィンドランダを中心にしたもののみ、ここで掲げておきたい。イングランド北部辺境やローマン・ブリテン一般にかんする文献は、刊行予定の拙書『海のかなたのローマ帝国』の巻末文献目録を参照されたい。また、ウィンドランダの発掘報告書は本ページの註 11 を、木板文書テキストは註 14 を参照のこと。

P. Bidwell, *The Roman Fort of Vindolanda*, London, 1985; Anthony R. Birley, *Garrison Life at Vindolanda: A Band of Brothers*, Stroud, 2002; Robin Birley, *Vindolanda: A Roman Frontier Post on Hadrian's Wall*, London, 1977; id., *Vindolanda's Roman Records*, Greenhead, 1994; id., *The Making of Modern Vindolanda with the Life and Work of Anthony Hedley 1777-1835*, Greenhead, 1995; id., *Roman Records from Vindolanda on Rome's Northern Frontier*, Greenhead, 1999; id., *Chesterholm: From a Clergyman's Cottage to Vindolanda's Museum 1830-2000*, Greenhead, 2000; id., *Vindolanda: Fort and Civilian Settlement on Rome's Northern Frontier*, Greenhead, 2002; A. Bowman, *Life and Letters on the Roman Frontier: Vindolanda and Its People*, London, 1994.

- 8) Anthony Birley, *op. cit.*, p. 50.
 9) 代表的な著作に以下のものがある。Eric Birley, *Roman Britain and Roman Army*, Kendal, 1953; id., *Research on Hadrian's Wall*, Kendal, 1961; id., *The Roman Army Papers 1929-1986*, Amsterdam, 1988.
 10) アントニー・バーリーはハドリアヌス帝、マルクス・アウレリウス帝、そしてセプティミウス・セウェルス帝の伝記的研究書を著しただけでなく、ローマン・ブリテンに関しても以下の著作や論文を多数執筆している。Anthony Birley, *Life in Roman Britain*, London, 1964; id., *The People of Roman Britain*, London, 1979; id., *The Fasti of Roman Britain*, Oxford, 1981; id., *Garrison Life at Vindolanda: A Band of Brothers*, Stroud, 2002.
 11) ウィンドランダ遺跡発掘の成果は、トラストの作業によって、以下のような冊子として刊行されている。Robin Birley, *Vindolanda Research Reports, New Series, vol. I: Early Wooden Forts: Excavations of 1973-1976 and 1985-1989*, Greenhead, 1994; Eric, Robin and Anthony Birley, *Vindolanda Research Reports, New Series, vol. II: Early Wooden Forts: Reports on the Auxiliaries*, Greenhead, 1993; C. V. Driel-Murray et al., *Vindolanda Research Reports, New Series, vol. III: Early Wooden Forts: Preliminary Reports on the Leather, Textiles, Environmental Evidence and Dendrochronology*, Greenhead, 1993; Robin Birley, *Vindolanda Research Reports, New Series, vol. IV: The Small Finds Fasc. 1. the Weapons*, Greenhead, 1996; Andrew Birley, *Vindolanda Research Reports, New Series, vol. IV: The Small Finds Fasc. 2. Security: the Keys and Locks*, Greenhead, 1997; J. Blake, *Vindolanda Research Reports, New Series, vol. IV: The Small Finds Fasc. 3. the Tools*, Greenhead, 1999; Robin Birley, *Vindolanda Research Reports, New Series, vol. IV: The Small Finds Fasc. 4. Writing Materials*, Greenhead, 1999; Robin Birley, J. Blake & Andrew Birley, *Vindolanda 1997 Excavations Praetorium Site Interim Report*, Greenhead, 1998; Robin Birley, Andrew Birley & J. Blake, *The 1998 Excavations at Vindolanda: the Praetorium Site Interim Report*, Greenhead, 1999; Andrew Birley & J. Blake, *The Excavations of 1999. Interim Report on the Work on the Southern Defences of Stone Fort Two*, Bardon Mill, 2000; J. Blake, *The Southern Defences of Stone Fort Two, with the Circular Huts and other Features*, Greenhead, 2001; Andrew Birley, *Vindolanda's Military Bath Houses*, Greenhead, 2001.
 12) Andrew Birley, *Vindolanda's Military Bath House: The Excavations of 1970 and 2000*, Greenhead, 2001, p. 4.
 13) Robin Birley, *Vindolanda: Fort and Civilian Settlement on Rome's Northern Frontier*, Greenhead, 2002, p. 20.
 14) ウィンドランダ木板文書については、以下のものをとくに参照した。ただし、雑誌掲載のテキスト校訂などは省略する。J. N. Adams, *The Language of the Vindolanda Writing Tablets*:

- An Interim Report, *Journal of Roman Studies* 85, 1995, pp. 86–134; Anthony Birley, *Garrison Life at Vindolanda: A Band of Brothers*, Stroud, 2002; Robin Birley, *Vindolanda's Roman Records*, Greenhead, 1994; id., *Roman Records from Vindolanda on Rome's Northern Frontier*, Greenhead, 1999; id., *Vindolanda Research Reports New Series vol. IV fasc. 4: Writing Materials*, Greenhead, 1999; A. Bowman, *The Roman Writing Tablets from Vindolanda*, London, 1983; id., *Life and Letters on the Roman Frontier: Vindolanda and Its People*, London, 1994; id., *The Roman Imperial Army: Letters and Literacy on the Northern Frontier*, in: A. Bowman & G. Woolf (ed.), *Literacy and Power in the Ancient World*, Cambridge, 1994, pp. 109–125; A. K. Bowman & J. D. Thomas, *The Vindolanda Writing Tablets*, Newcastle upon Tyne, 1974; id., *Vindolanda: the Latin Writing-Tablets*, London, 1983; id., *The Vindolanda Writing-Tablets (Tabulae Vindolandenses II)*, London, 1994.
- 15) Bowman, *Life and Letters on the Roman Frontier: Vindolanda and Its People*, p. 17.
 - 16) A. Bowman & J. D. Thomas, *Vindolanda: the Latin Writing-Tablets*, London, 1983.
 - 17) id., *The Vindolanda Writing-Tablets (Tabulae Vindolandenses II)*, London, 1994.
 - 18) A. Bowman, *Life and Letters on the Roman Frontier: Vindolanda and Its People*.
 - 19) *ibid.*, p. 15.
 - 20) *ibid.*
 - 21) Anthony Birley, *Garrison Life*.
 - 22) 本誌掲載のジリアン・カー博士の論文 p. 26 をも参照されたい。
 - 23) Anthony Birley, *op. cit.*, p. 61.
 - 24) *ibid.*, p. 54.
 - 25) *ibid.*, pp. 85–86.
 - 26) *ibid.*, p. 89.
 - 27) *ibid.*, p. 50.
 - 28) *ibid.*, pp. 50–51.
 - 29) 島田 誠, 『歴史遊学』所収論文, pp. 225–227.
 - 30) Bowman & Thomas, *The Vindolanda Writing-Tablets (Tabulae Vindolandenses II)*, p. 333; Antony Birley, *op. cit.*, p. 100.
 - 31) Antony Birley, *op. cit.*, p. 124.
 - 32) *ibid.*, p. 96.
 - 33) *ibid.*, pp. 99–100.
 - 34) Robin Birley, *Vindolanda: Fort and Civilian Settlement*, p. 5.
 - 35) Antony Birley, *Garrison Life*, p. 31.
 - 36) 拙書『海のかなたのローマ帝国』第4章参照。

追 記

本稿は、文部科学省（日本学術振興会）科学研究費基盤研究（C）（2）と高梨学術奨励基金の助成金による研究の成果の一部である。

オックスフォード大学古代文書研究センターが作成したウィンドランダ文書の Website が、2003 年 3 月 20 日に公開される予定である。試作段階のものを拝見したが、興味深く仕上がっている。サイト名は Vindolanda Tablets Online で、<http://vindolanda.csad.ox.ac.uk/> で開ける。御覧になることをお勧めしたい。

《English Summary》

Vindolanda : History and the Writing Tablets

Takashi MINAMIKAWA

Vindolanda, in the north of England, is one of the most well-known Roman forts along Hadrian's Wall. The remains of the third and fourth century stone fort and civilian settlement are clearly visible. Vindolanda is very famous among scholars of Ancient History for the discovery of many wooden tablets. In the summer of 2002, the author of this paper visited Vindolanda again and met Dr. Robin Birley, the Director of Excavation. Getting more information on Vindolanda from this research trip, in this paper the author tries to explain the history of Vindolanda and to consider the structure and character of the world of the Roman soldiers on the northern frontier by analysing the Vindolanda writing tablets. His provisional conclusion is as follows :

The world which the writing tablets show us is a space for Roman soldiers from other provinces. For the soldiers who acquired an identity that differentiated them from the indigenous Britons, whom regarded as "other", the Roman Empire embodied the norm for their life ; however, it exercised no exclusive rule that distinguished between the "Romans" and "others". Rather, the world of the Roman soldiers on the northern frontier was a space where people with variable identities could live and work together.